

# 「倫理を中心とした世界観」としての仏教

アブドウサラム・グセイノフ

江口 満 訳

今日、仏教に関心をもっているのは、仏教徒だけではない。また、仏教学者だけでもない。仏教は、世界的現象となり、世界の関心と呼ぶところとなっている。

仏教は、偉大なる精神的伝統のひとつであり、グローバル化がすすむ現代世界は、そうした様々な偉大な精神的伝統の数々が複合的にからみあつた中で文化が形成されている。

したがって、時代の要請にこたえ、21世紀の精神に合致していくためには、仏教を知ることが不可欠であり、それも単なる知識ではなく、仏教に理解を示し、

仏教を信奉する人々に敬意を払うための知識でなければならぬ。仏教は、人文分野において現代人が知っておくべきスタンダードとなりつつある。その観点において、ヨーロッパをはじめとする他の知的・精神的伝統との比較において際立つ仏教の独自性について考える意味があり、また考えるべきである。

ひとつの体系的な世界観、独特な精神宇宙としての仏教の独自性は、それが、倫理を中心にするということではないかと、私は思う。<sup>(注)</sup>

王子であつた釈尊が、宮殿という人工的な楽園を去

って、一放浪者として世間に出るといふ行動にかられたのが、真の悟りの道を求めてのことであつたことも仏教の肝心な点である。ブツダの悟りである四諦の中で、全体の柱となつてゐるのは、四番目の中道を説いた道諦、八正道である。自己救済の道、自己の存在に個々が責任をもつという倫理を説いてゐるとされる仏教の倫理は、形而上学や認識論の帰結ではなく、むしろそれらの前提であり、基礎をなすものである。

### 永遠に答えのない「形而上学的問い」

仏教の特殊性を理解する上で、際立っているのが、道徳と学問的知識、哲学が認識論において異なる位置づけになつてゐる点であると考ええる。(小マールンクヤ経(摩羅迦小経)と「ミリンダ王の問い」にあるとおり)

ブツダは、性格的に異なる答えを引き出す4種類の問いがあると説く。1番目は、はっきりとした答えがある問い、2番目は、条件つきの答えをもたらず問い、3番目は、さらに問いかけを生じさせる問い、4番目は、却下されるべき問いである。

はつきりした答えが出てくる問いは、たとえば、「形のあるものは、はかないか?」「感覚は、はかないか?」「識別は、はかないか?」「構成要素は、はかないか?」「意識は、はかないか?」のようなものがある(これら認識における5つの執着を、行為の観点から見た場合、むさぼり貪・いかり瞋・おろか癡・だんじ慢・疑の五鈍使となる)。

条件つきの答えが引き出される問いとは、「はかないものとは、形のあるものか?」「はかないものとは感覚であるか?」などである。つまり、答えが部分的真理であることを強調するために、条件をつけることが必要となつてくるのである。たとえば、「はかないものは感覚であるか?」という問いへの答えは、「しかり、ただし、感覚だけではない」ということになる。

問いに対して問いで答えるというものは、「存在は」視覚によつてすべてを識別するか?」といった問いがなされた場合である。この場合、「すべて」というのが何を意味するのか、出された問いを確認しなければならぬ。

問いを却下するというのは、たとえば、「世界は永遠



ロシア科学アカデミー「哲学研究所」でのシンポジウム（モスクワ、9月11日）。「世界の諸文化の中の仏教」をめぐる、開会と閉会のスピーチも含め16の論者が発表された

か否か？」「世界は無限か否か？」「心と体は、同じものか？」「死後も如来は存在するか？」といった問いがなされた場合である。

最初の問題群は、生きる意味を問うものとして考えることができる。それは、この世に存在する意味とは何か、人間は何をめざすべきかという、より根本的なひとつの問題を具体的に問うたものである。2番目、及び3番目の問題群は、世界についての具体的な知識が問われている。4番目の問題群は、ヨーロッパ文化の用語を使うと、哲学的、形而上学的といわれる問いである。

人間存在の意味あるいは目的・方向性についての問いには、はっきりした答えが求められる。それがないと存在自体が不可能となるからである。M・M・バフチンの言葉を借りると、「存在にアライバイはない」のである。人間は生きていく限り、自身の行為を意識的にコントロールしており、自身の判断にもとづいて行動をしている限り、何らかの目的のために行動しているのである。人間が一定の方向へ動くことなく、一歩を

踏み出すことはできないし、自身の行為に何らかの意味を付加しないで、行動することはできない。人間は、「感覚は、はかないか？」といった問いに明快に答えるべく宿命づけられている。そこから逃げることはできないのである。ともかく、正しい答えを見出し、自身の人生に真の意味を見出さなければならぬ。ブッダは、それをなしたと考えており、だからこそ悟りを開いたとされるのである。

世界についての知識は、常に不完全で不正確なものであり、常にその深化と具体化が求められる。そうした知識は相対的な性格のものであり、人間が生きる意味に対して直接の影響は及ぼさない。むしろ、そうした知識のほうこそ、人間の現実的な世界観、つまり、第1問題群への答えに左右されるところが大きい。

形而上学的問いは、問いのまままで終わるのが常である。それらは、際限がなく、永遠に取り組むような性格のものである。そして、その真実性に疑いの余地がないというような、はっきりした答えは存在しない。「それらに答えられるような理由も根拠もないがゆえに、

却下するのである」(ミリンダ王の問い)。まして、それらの問いは、生きる意味という最初の問題とは直接には関係がないために、簡単に却下する(答えを保留すること)ができる。おそらく、この点がブッダの世界観の倫理志向を示すもつとも重要な点ではないだろうか。

ブッダの倫理は、形而上学にも、認識論にも依存しない。そうしたものに、根拠を求めないのである。ブッダの倫理自体が、形而上学や認識論への鍵となっている。ブッダがすべての力を傾注したそのふるまい自体が、つまり闇から光へ、無明から悟りへ、現世の生から完全な涅槃へと志向する彼の倫理が、あるいは、我々がそう呼ぶところのものが、彼の存在論の起源でもあり、また認識論の起源でもある。ブッダは、単に世界の深奥の構造に関心をもっているのではなく、それが彼自身の中で認識されたかたちにおいて、彼自身に左右される世界の構造に関心があるのである。ブッダにとって、存在とは、自分自身が責任をとる存在なのである。そのため、存在論は倫理が必要とする範囲に限定される。ブッダにとって、世界についての知識

をもつということは、いかに正しく生きるかということの意味する。それゆえ、真の知識は、彼自身の存在の真理、人生の正しい意味というかたちでのみ、存在するのである。

修行者マールンクヤは、ブツダに、第4問題群（形而上学の問題）、つまり、宇宙は永遠か否か、宇宙は有限か否かという問いに答えてほしいと要請する。しかも、はつきりした答えを得られないならば、これ以上ブツダのもとで修行していくことはできないと言った。ブツダはそれに対して、そのような問いに答えられるよう教えるなどとは約束したことがないし、自分の説法とはまったく関係ないと答えた。

そして、もしも、宇宙は永遠か否か、宇宙は有限か否かという問いの答えが見つからないうちは、ダルマの修行をしないと本気で言う者がいたならば、その者は、答えを得ないまま死んでしまうだろうと語ったのである。それは、矢で負傷した人が、どこの誰が矢を放ったのか、矢が何からできていいのか、何の羽が使われているのかつきとめないうちは、医者に矢を抜か

せないと言い張るようなものであると。「マールンクヤよ、ダルマにのっとった人生は、宇宙が永遠でないという意見とは関係のないものである。宇宙は永遠であるという意見もあるし、宇宙は永遠でないという意見もあるが、まずあるのは、生、老、病、死、愚痴、痛み、苦勞、懊惱である。私は、これらすべてを今世で止めることを説いているのである」

生きる意味についての知識は、絶対的である。世界についての知識は相対的であり、仮定的である。形而上学の問題は、それ自体、答えをもっておらず、問いとして永遠にある。しかも、それらは合理的認識の境界線を指し示しており、事実上、第1問題群に我々を立ち戻らせる。究極の問いは、それが道徳的模索と一致した場合、はじめて意味をもち始める。実践的倫理は、生の恒久的意味と救済の道を説いたブツダが関心をもつ対象として、唯一とは言わないまでも、優越性をもっている。

ブツダの4つの問いは、人間による真理のとらえ方の異なる形態から発している。倫理的問題の場合、真

理は、極めて実践的な性格を帯びてくる。倫理的（道德的）真理は、個人のふるまいをおして打ち立てられなければならないものであり、人間のふるまい以前にも、以後にもないのである。第2、第3の問いは、認識される真理を問うている。最後（第4）の形而上学的な問いは、考え出され、観念的に検証されるものであり、その際、まずその人がもともと道德観がいかなるものであるかに左右される。

#### トルストイも「認識より倫理を優先」

最後に、仏教が倫理を核とした世界観であることを示す、間接的ではあるが歴史哲学的な根拠をあげてみたい。それは、トルストイの思想とつながりをもっている。周知のように、トルストイは、体系的な宗教・道德哲学を築いた。それは、人間存在の合理的根拠を人間の道德性に求めたもので、合理的世界観は、人間の理にかなった行為と結びついている。確固たる生きの意味を模索し、何よりも、その意味を体現し、行為主体である人間自身が完全に統制できるような生き方

を探っていったトルストイは、暴力に対する非抵抗の思想にいきついた。トルストイは、すべての人間の活動を規制するものとして、非抵抗という絶対的道德理念を立て、世界にある道德的悪との戦いを人間の内面世界へ移行させた。

トルストイは、イエス・キリストの山上の垂訓を自身の間観、世界観の根拠とし、自身の思想がもつとも正しいキリスト教の解釈であると考えた。彼は、信仰のシンボルの代わりに山上の垂訓を根本とし、イエス・キリストの神性を否定して、偉大な精神の改革者であるとした。

N・F・フォードロフやN・A・ベルジャエフをはじめとするトルストイ批評では、トルストイの世界観は、キリスト教というより、仏教的であると結論されている。もつとも、そうした批評には、彼の思想の単なる性格づけというよりは、非難もこめられているが、これはまた別の問題である。ここで強調すべきは、これらの批評が、的確に指摘している以下のことである。すなわち、認識より道德を優先させ、倫理を優先させ

たトルストイの世界観は、ヨーロッパ哲学思想の本流からは逸脱しているということである。その精神と形態からいって、彼の思想は、確かに仏教に近い。彼の思想と仏教の方が真理により近いという可能性もないとはいえないのではないだろうか。

## 注

哲学的論述は、そもそも書き手が自身の見解を述べるものであるから、「私は思う」というような但し書きは、「思わない」という但し書きならともかく、余計なものである。ここで私があえてこのように書いたのは、有名な仏教哲学の専門家であるV・G・ルイセンコ教授が、拙文を読んで下さったあと、次のようなコメントをされたからである。

「これは、20世紀初頭の仏教観です。そのような考えに立っていたのは、主にプロテスタント信者の仏教研究者（リス・デヴィズ夫妻など）です。後に、このような考え方は、根拠のない単純化であるとされるようになりました。たとえば、シチエルバツコイは、これについて、機知にとんだ批判をしています。その批判は、V・N・トポロフが『ダンマパータ（法句経）』の訳書（1961）の中で書いていますが、それを書

いたのは、ひとえに、当時、宗教について論じることが許されなかったという社会事情があったためです。

仏教は、輪廻からの解放に重きを置いていますが、これは救済論であって、倫理ではありません（あるいは、倫理の概念を拡大解釈する必要があります）。仏教において、人間共通の道德規範（パンチャ・シラ・殺すなかれ等の「五戒」としての倫理は、道（声聞道）の一番最初に、単に手段としての位置づけで出てくるのです。それは、自身の意識を変えていく内面的作業の道である仏道に立つための準備段階です。後期仏教（特に密教）において、人間の欠点や欲望といったネガティブなエネルギーが、精神の道の重要なエネルギー源であるとされたのも、偶然ではありません）少なくとも、初期仏教、つまり釈尊在世の仏教においては、明らかに倫理が中心であったわけであるから、20世紀はじめのプロテスタント信者は（ちなみに、L・トルストイも同じような考えだった）、その意味で正しかったということになる。ただし、このような主張においては、「倫理」の概念が確かに拡大解釈される（その点でもV・G・ルイセンコ教授は正しい）。つまり、倫理といっても、仏教の倫理的な部分（パンチャ・シラ）だけを意味するのではなく、そこには、仏教の倫理的（道德的）な精神全体が含まれることになる。人間のふるまいを説く段階だけではなく、苦からの解脱へと導く八正道全体が含まれるのである。

複雑で壮大な仏教の歴史において、仏教を哲学思想として、あるいは、宗教思想として、あるいは宗教哲学思想として解釈しようとする試みがみられた。しかし、仏教の特徴は、そのようなところにあるのではないと私は思う。仏教は、人間が精神的、道徳的に成長していくための教えである。救済の道を示しているのである。

「救済論は、倫理ではない」というV・G・ルイゼンコ教授の言は、まったく正当である。しかしながら、ブッダの救済論は、他のどの宗教にもみられないほど倫理と深くかかわっており、人間自身の努力こそが救済の唯一の(ただし、極めて長い)道なのである。無論、人間自身の努力は、狭義の規範的意味で倫理的であるだけでなく、道徳の領域に及んでおり、a) 実践的であり、b) 絶対的な倫理的意味が付与された目的をめざすものであるがゆえに、「倫理的」ということができるのである。

これと関連して、もう一点述べておきたい。ブッダは、ニルヴァーナの本質を肯定的表現で規定することを避けた。それは、ブッダがもつとも関心をもつていたのは、「道」であったということではないだろうか。

(A・グセイノフ／ロシア科学アカデミー哲学研究所所長)

(訳・えぐち みつる／東洋哲学研究所委嘱研究員)